

会 議 録

会 議 名	令和2年度第2回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事 務 局	市民部 コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開 催 日 時	令和2年10月13日（火）18時30分～19時35分		
開 催 場 所	市立はけの森美術館 多目的講義室		
出 席 委 員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 坂井文枝委員 浜田真二委員 鈴木遵矢委員		
欠 席 委 員	なし		
事 務 局 員	コミュニティ文化課文化推進係 吉川、岡本 同 はけの森美術館学芸員 中村、桑野		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由		傍聴者数	0人
会 議 次 第	1 事業実施報告等 2 意見交換等 3 その他		
会 議 結 果	別紙のとおり		
会 議 要 旨	別紙のとおり		
提 出 資 料	開催した展覧会・ワークショップ等及び今後の予定		

令和2年度 第2回小金井市立はけの森美術館運営協議会

令和2年10月13日(火)

【鉄矢会長】 では、皆様、こんばんは。本日は、ご多忙の中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。

ただいまより令和2年度第2回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開会いたします。

では、資料の確認に入りますけれども、事務局に配付資料の確認をお願いします。

【事務局】 お手元に次第と事業の報告の紙が1枚あるかと思しますので、それとあとは、この第1回の運営協議会の会議録がございますでしょうか。全部あれば、資料はそろっております。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。それでは、次第1の事業実施報告等について事務局から説明をお願いいたします。

【桑野学芸員】 前回、所蔵作品展、夏はいつも企画展示をしているんですけども、コロナということで企画展示ができなくなってしまい、所蔵作品展になりました。

「木陰 一中村研一、自然を描く」というのと、同時開催、特集展示「にゃーにゃーにゃあー中村研一、猫を描く」という形で、当初、2階を特集展示の猫の展示という形で、1階を木陰という自然をテーマにした展示で想定していたんですけども、こちらもちよっと直前になりまして、1階の展示室が設備の不備が見つかりまして、御覧いただいたかと思うんですが、急遽、2階で木陰展と猫の展示を併せるような形で開催させていただきました。

会期としましては、7月29日から9月13日という長さを取りまして、開館時間がコロナウイルス対策ということで午前11時から午後4時、通常は10時から5時まで開催しているんですけども、短縮の形で開催をすることになりました。

休館に関しても、通常は月曜日休館にしていたんですが、これは従来から運営協議会の提言によって週5日開館という形はどうだろうかということが提言されていて、今回、コロナということも併せて試行して、月曜日、火曜日の休みという形でやってみました。

観覧料につきましては、通常は一般200円、小中学生が100円という形で行っているんですが、今回、1階が急遽使えなくなってしまったということで、2階ラウンジの公開にしたんですけども、これを併せて100円、小中学生50円という半額の形で開催

しました。

観覧者数についてなんですが、結果としましては、861人、入りました。

これは、所蔵展が3月からいつも5月まで行うんですが、春の結構いい時期に行って、以前、「すなわち喫茶す」という展覧会が行われたときに1,305人だったんですけども、今回、あまり広報とかが全然できない、ほとんどしていない状態でこの人数が入っているんで、もう少し力を入れてやったら、かなりいい数字が入ったのではないかなと思っているので、ちょっと残念かなというふうに思っています。

一方で、分析してみると、比較的、小中学生の人数ですとか、未就学児の入館が多くなっています、この「すなわち喫茶す」のとき、1,305人に対して38人だったんですが、今回は、一般が701人に対して44人という形、44人入っていますし、未就学児に関しては、「すなわち喫茶す」のときは1,305人で15人だったんですけども、今回、未就学児が23人、入っているということで、実際、ここで下で働いていたら、御家族の方がにやんにやん見る？みたいな感じで小さい子を連れてきていたという感じで、比較的手応えがあったので、テーマの設定の仕方とか、こういったタイトルの出し方によっては、比較的小子さんにも来ていただけるような展示が増えるのかなというふうに思いました。

一方で、手帳を提示される方が「すなわち喫茶す」のときには102人、入っているんですけども、やはりコロナということが影響しているのか、24人ということでちょっと少ない数字になっています。こういったところに今回の影響が表れているかなというふうに思います。

以上です。

【鉄矢会長】 説明は終わりました。何か質問、ご意見等がありましたらお願いいたします。

【坂井委員】 先ほど広報はあまりなされなかったと聞きましたけど、私、何か駅でポスターを見たような。でも、毎回ポスターがあるわけじゃあないですね。

【桑野学芸員】 企画展のときは出しています。

【坂井委員】 出しているんですか。

【桑野学芸員】 はい。

【坂井委員】 出ているんですね。全然、こういう形で関係が持てるか思わずに、ああ、ポスターが出ているんだみたいな。はけの森のポスターは駅で見たんですが、初めて

だったので。

【桑野学芸員】 昨年も出ていました。期間が1週間単位で予約するんですけども、2週間分とかという形ですと出せないんですね、予算の関係もあって。なので、たまにたまそのときに駅に行っていたか目にしてもらえないという形になっています。

あとは、普段はインターネット上に載せていただくとか、無料の雑誌とか、もちろん、取材なんかも頻繁に行っていて、都度、載せてもらうような形で、載ると人が来るみたいな感じなんですけれども、ただ、今回は、ちょっとコロナの様子が多分分らなかったんで、そういった意味では大々的にはしなかったんですね。

そういう意味では、比較的、しかも時間も短いですし、月火も休みなので、そういうところでは結構善戦したかなというふうに思います。

【坂井委員】 ありがとうございます。

【鉄矢会長】 そのほかにもございますでしょうか。

【原田委員】 そのこのラウンジと一緒に公開されたんですね。これは、ふだんの展示会館のときは入れないんですね。

【桑野学芸員】 そうなんです。

【原田委員】 私も初めて見たんですけども。にゃーにゃーの展示そのものがふだん知らない中村研一の猫とか、それから、文章もなかなか猫愛が籠もっていて面白かったですね。中村研一の知らない側面があって、それを見た続きで、こっちの、ああ、ここで描いていたのかということ、非常に効果が上がったというふうに思いました。

【桑野学芸員】 ただちょっと描いていたというと、描いていたわけじゃないんですね。

【原田委員】 描いていたわけじゃないんですね、ここでは。

【桑野学芸員】 そうなんです。ちょっとその辺は誤解をさせたかもしれないのですが、ただ、このところにアトリエがあって、ああいった雰囲気暮らししていたということですね。

ありがとうございます。ラウンジについては、今回、ちょっと特別観覧ということでやってみたんですけども、折々、こういう形で公開していくと、初めてああいうふうに備品類を組み合わせるあの部屋を出してみるということで組んでみたんですが、比較の見栄えがするとか、見て十分楽しめるような形にできたので、今後も検討次第でできるかなというふうに思っています。

【原田委員】 いつも見られるより、たまに見られるほうがいいと思いますので。

【桑野学芸員】 効果がありますね。ありがとうございます。

【鉄矢会長】 そのほかにございますでしょうか。

【坂井委員】 すみません、質問なんですけれども、毎回の企画というのは、全然存じ上げないのでお聞きしたいんですが、ちょっと環境は特別な環境ではありますけれども、企画ごとに集客の目標みたいなものは設定しているんですか。今回は1,000人、集めたいとか、1,500人にしたいとか、そういう目標はないんですか。

【桑野学芸員】 数値目標というのは、基本的には設けていないんですけれども、やっぱりこの体制というか、展示に対する形、テーマとかこういうコンセプトでやっていこうというのはある程度、小さい館なので、ちょっと大きい館ではできないようなテーマとか、そういったものもやっていくということで、大分学芸員の積み重ねでなっていて、お客さんも企画についているんですね。リピーターの方が多いんです。

なので、そういったところで1,000人前後というところで動いているかなと思います。

【坂井委員】 そうなんですか。ということは、先ほどおっしゃったように、桑野さんが、この環境で860人行っていたら、結構頑張ったよねという感じが。

【桑野学芸員】 そういところですね。

【坂井委員】 分かりました。

【鈴木委員（館長）】 若干補足なんですけれども、企画ごとの集客目標というのは設定していないんですが、年間の入場者数の目標というのは、しっかりとあります。

【坂井委員】 あるんですね。

【事務局】 5,000人です。5,000人を目標にやっています、やっぱりその年によって上がり下がりはあるんですね。

去年のように、この前の運協でも言いましたけれども、東京都の広報に掲載されると6,000人と上がったりとか、あとは、共同巡回展とって、御覧になった方もいると思いますが、猪熊弦一郎展なんかやっぱり過去最高で7,000人、入ったんですけれども、なかなかいい展示をしているから人がすごい集まるというわけではないので。

ただ、やっぱり市の目標としては、年間5,000人を目安としてやっていますけれども、ただ、そればかりが評価ではないので、でも、できればそこまで人が入ってほしいなというのがあります。

【鉄矢会長】 多分、僕が言うと、はけの森美術館の在り方の出だしのほうの中で、人

【鈴木委員（館長）】 今回の展覧会の時期とは直接かぶらないんですけども、美術館ホームページの閲覧状況というのですか、その解析で、たしか9月20日から、期間がすごく短くてあれだったんですが、見てみたところ、いろいろな地域から閲覧されている方が多くて、市内は当然そこその数があるんですけども、一番多かったのは横浜市だったんですね。なぜかはちょっとよく分析しないと分からないですけども。横浜、武蔵野、それから、あと近隣の三鷹とか西東京とか、新宿、中野とか、杉並とか、いろいろな地域から御覧になって、それが直接来館につながっているかは、ちょっとまだ分析できるような資料を持っていないんですが、あとは海外から、アメリカとかオーストラリアからも御覧になっている方がいるというのもあるので、やっぱりインターネットはうまく使えば広く知っていただく機会になるのかなというふうに思っておりますので、ちょっとまたデータを分析して、運協のほうにもちょっとご報告させていただければなというふうに思っております。

以上です。

【鉄矢会長】 もう一つ質問なんですけれども、これは市の方針もそうなんだろうと思うんですが、今、大学もすごく難しい立場に置かれていて、大学教員は、とにかく学生たちに自粛を求める。動くな、集まるなというので。そんな中で自分がどこかの会合に出ていったりするわけにはいけないので、自分も経済を止める人間になっていて、役所のほうの施設としても、役所としては密駄目だよ、自粛しなさいよムードの中で、来てねという微妙なことをやっていたというふうに考えていいんですか。

【桑野学芸員】 そうですね。全く、ほかのところの比較的動向なんかもやはり調べてやったんですけども、全く見られないようにしてしまうというのは、ちょっとなかったですね。

やはり広報との兼ね合いもあって、開けていますと、個人のご判断で来たら、手を消毒して、マスクをしていただいといるところ、お客さんは、すごくその辺を分かってくださっている方が多くて、協力いただけたかなと思うんですけども、いろいろと微妙な時期でしたね。

【山村委員】 6月以降は、国の方針にのっとって東京都も館を開けて、それでソーシャルディスタンスを取った。手の消毒だとか、熱を測るだとか、そういったガイドラインが6月前に日本博物館協会から出された。そのガイドラインに沿って開けて、感染拡大防止対策をしっかり取って開けてくださいというのが出ていたんで、恐らく小金井市のほう

もガイドラインに沿ってやっていたと思うんで、いいかなと思います。

それに関連して一つ、今の民間状況を見ると、大体、期間から考えて1日に20人前後かなと思うんですけども、一応、入場制限の想定はしていたんですか。

【桑野学芸員】 もし多くなってしまったら、見ていて部屋が密になりそうだったら、外でお待ちいただいてという形を取ろうというふうにはして、たまたまなんですけれども、20人前後で回していくと、そういう判断が、2階だけだったんですが、うまく入れ替わり立ち替わりで入ってくださって、ちょうどよかったというのがあります。

【山村委員】 具体的な人数、例えば1時間に10人までとか、5人までとか、何かあったんですか。

【桑野学芸員】 時間で区切るのではなくて、防犯カメラで見えるんですね、部屋の状況は。あまりに密集したりとか、知らないお客様同士がくっついてしまいそうになりそうだったら、もう次は入れないという形を取っていくように、ちょっと数でやっていくと、うちのマンパワー的には負担が大きすぎるので、人数でという形ではなくて、見て間が取れていなければという形を取っていました。

【山村委員】 分かりました。

【鉄矢会長】 多分、数値を出していたほうが、楽かなと思うんです。滞在、館内に何人以上は駄目ですというのを、一応、基準でやると、マンパワーじゃなくて、機械的に、ちょっとお待ちくださいと言えるのかなと。入っている人数が決まっていれば、そんなに難しくないのかなと思って。

というのは、あとは、説明責任を求められた場合に、見て多いなと思った、じゃあ、何人が多いんだよと言われそうな気がするので。

【桑野学芸員】 でも、そんなに正直、いっぱい来ることはないのです。

【鉄矢会長】 なくてもいいんですよ。

【桑野学芸員】 5人以上のグループのときには、事前にご連絡くださいという形を取っていたんですね。

【鉄矢会長】 今の悪いんじゃないくて、山村先生がおっしゃったように、何かそういうふうに使っていたほうが、今後のときに、それをやっていたんですという言い方はしっかりできるのではないかなという。

【山村委員】 一般的に言えば、平米数を3平米で割るか、4平米で割るか、2平米で割るか、ソーシャルディスタンス、あの当時でいけば、2掛ける2の4平米で割って、東

京都の美術館ですけれども、何か目安があったほうが、確かに説明はしやすい。

【鉄矢会長】　　そこまで入らないと思う。だからこそ数値目標を作っておいて、それで目視で確認でもいいんですけれども、でも、どこかで本当に多いなといったときに、理由として今はというのができるのではないかなというふうに。

【鈴木委員（館長）】　　先生がおっしゃられるように、人数制限する根拠が見ていて客観的な数字じゃなく、監視していた者の主観によるとなったときに、何かトラブルになったときに、確かにおっしゃられるとおりでなというふうに思います。

次回以降の開催について、先生からもご助言いただいたとおり、4平米ぐらいですか。それが、今、緩和されて2メートル四方とかそれぐらいのイメージで、わりかしすごい数が入れる数になると思うんですけれども、出入りも何となく見ながら、そういう数値目標も一応あると設定しておいて、それを超えることは多分ないと思うんですが、根拠はこうですという理由にしたいと思います。ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　今後、開催予定の展覧会は、まだ話していませんよね。

【中村学芸員】　　よろしいでしょうか。すみません、こちらのオンライン上のほうから中村のほうで報告させていただきます。

今後開催予定の展覧会なんですけれども、2番のところに記載がございますように、展覧会名「ふたたびの北京官話—中村研一が描く人体のフォルム」と題しまして、所蔵作品展を今月の月末から開催する予定です。予定としましては、会期は12月6日までとしております。

開館時間については、先ほど桑野のほうからもありましたように、新型コロナウイルスの対応の関係で、引き続き午前11時から午後4時までという短縮した形を継続する予定です。併せて休館日についても、毎週月曜、火曜の週2日の休館日ということを継続いたします。

ただし、秋の行楽シーズンが含まれているというところもありまして、11月3日、11月23日のそれぞれ火曜と月曜の祝日が作られております。こちらの祝日に関しましては、開館をして、それぞれ翌水曜日、11月4日と11月25日を振替休館日とするという形で対応を図ります。

観覧料に関しましては、こちらは一般200円、小中学生100円という形で、ふだんの所蔵作品展と同額という形を取りたいと思います。

この展示に関しましては、春にまず「北京官話」という所蔵作品展を予定しておりました、このときに新収蔵作品である「北京官話」という作品を皆様に御紹介をしたいというふうに考えていたんですけれども、こちらの春の所蔵作品展が展示作業まで完全に終わった状態で、あとは会期がスタートするのみというところになって新型コロナウイルスによる緊急事態宣言が出まして、感染拡大防止を図るために中止になってしまったということで、秋に、春にまぼろしに終わってしまった作品展をやり直す、ただ、焼き直しという形では、やはりこれはよくないだろうということで、内容を充実させて所蔵作品展として改めてやり直したいというふうに考えて、こういった「ふたたびの北京官話」というタイトルにしております。

前回のときは、2階の展示が猫の展示になっておりまして、この猫の展示は、先ほど桑野のほうからも報告が、夏の所蔵作品展に結びつくものになりましたので、2階を併せて、今回、「北京官話」に関する展示にできるという形になりましたので、ここに中村研一が描いた人物画などを展示することで、全体的にテーマのまとまりをより明確にして、より多くの作品を展示するという形にしたいと思っています。

チラシなどが今週の末に納品される予定でして、チラシなどができたら改めて委員の皆様にもお目かけられればというふうに思っております。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。こちらに関しても、質疑等と御意見はありますでしょうか。

【山村委員】 ちょっと質問なんですけど、これは所蔵作品展という位置づけでよろしいんですかね。

【中村学芸員】 はい。所蔵作品展です。

【山村委員】 それから、1階と2階、どこを使うんですか。

【中村学芸員】 夏の展示、先ほどの報告にもありましたように、ちょっと緊急でのメンテナンスが必要になって1階展示室が急遽使用できなくなっていたんですね。

ちょっとこの休館期間内に判明した緊急メンテが必要な部分というところに、まず、検査が入りまして、原因の解明と、それから、どのような形で対策を立てるかというところの方針が既に固まっています。

コミュニティ文化課によりますと、来週、メンテの実際の作業も入るということですので、次の展示の会期が始まるまでには展示室の問題というのは、これは作品に影響がない形に、一旦、処置が行われまして、展示作業が行われるということになりましたので、次

の展示では1階の展示室を使用するという形にしたいと思っています。

【鉄矢会長】 空調の不具合でしょうか。

【中村学芸員】 そうではありません。

【事務局】 私のほうから説明しますか。

【鉄矢会長】 不具合の、先ほどからせっかく不具合を、せっかくというか、不具合の話が出ているので、何だろうという頭でもやもやしているよりも聞いたほうがいいかなと思ひまして。

【桑野学芸員】 ちょっと美術館としては恥ずかしいというか、いけないかなと思うんですけども、シロアリが出まして、幅木の部分が木なんですけど、床とかはコンクリ打ちですし、全体的には鉄筋コンクリート造りなので、今までそういったことはあり得ない想定だったんですが、ちょうどシロアリ、虫が食っているのを発見したんですが、その部分がじかに外のところにパイプみたいなものがあって、そこと土でつながってしまっているような状態になっていて、そういう場所があったんですね、たまたま。

そここのところが、ずっと年月をかけてらしいんですけども、幅木の部分まで浸食してしまって、7月の下旬、展示が直前だったんですが、見たところ、以前なかった穴というか、状態になっているのを発見して、すぐさま、こういう展示とか、館長に相談するという形で、ちょっと直さないとこれは開けられないですという形で、そこから2階の展示に切り替えたというところですよ。

【鉄矢会長】 珍しい状況ですね。

【桑野学芸員】 ちょっと私も経験ないですね。

【事務局】 やっぱりこういう土地柄に建っているんで、森の中にはいっぱいいるそうなんですけれども、ちょうど本当にパイプの下から入っただろうということですよ。

【桑野学芸員】 それはもちろん駆除というか、全面的にこの土地にいるシロアリをせん滅させる形で対策をとって、幅木の部分は塞ぐということで対応しようという、もちろん、そこで薩摩先生にも相談して。

【鉄矢会長】 いや、何か聞いていてそういう事例は、本当は博物館学会のほうに、これから設計するいろいろなところに、そういう点は注意しておいたほうがいいよというポイントなんだろうと思うよ、本当は。

【桑野学芸員】 ふだんでも、例えば公開承認施設にのつとった形で建てようとかとなれば、そういったことは起こらないんだと思うんですけども、ここは、やはり中村さん

の奥様、富子さんが造られたということで、部分、部分でちょっと満たさない部分があるんですね。そういったところが出てしまったということです。

正直、ちょっとびっくりしたというか、これはまずいことだということで。

【山村委員】 シロアリは、さすがにあまり聞かないですけども、でも、虫害というのは必ずあって、特に上野公園もそうだし、府中の森公園もそうだが、公園の中にある、自然の中にある美術館は必ず虫害はあります。

関東港業という専門業者に、必ず年に2回、モニタリングして、ピックアップして、何匹いたとか、何とかという虫が何匹いたとかやって。

【中村学芸員】 結局、シロアリだったところは検査ではっきりはしているんですけども、シロアリがいつから侵入していたのかとか、どのぐらい侵入しているのかということに関しては、これは、実際に駆除作業が始まってからはっきりしてくる部分もあるかと思えます。なので、運営協議会で、今後、例えばそういった作業が進んでいく中で、改めて1階のメンテナンスの進行状況という形で報告させていただくこともあるかと思えます。

ただ、1階の中でシロアリがそういった形で侵入したことは侵入したんですけども、業者にも見てもらいまして、侵入している数としては、恐らくそこまで膨大ではないだろうということと、既にこれ以上、侵入しないようにする処置というものを立てるめどはついているということ、それから、展示室の中の壁には入ってきているんですけども、内部そのもの、部屋の中にシロアリがうじゃうじゃしているわけではないということです、メンテナンスは次の展示までに可能であろうと思えます。

【桑野学芸員】 それで、今、文化財の現場は、どちらかというと、そういった虫害とかカビとかを発生させないという方向に行っていて、IPMメンテナンスというのも各館しているところが多くなっていると思うんですけども、残念ながら、はけの森美術館は、そういった予算がもともとついていなかったものですから、ちょっと把握できていなくて、トラップは置いているんですが、それを業者に出して分析に持っていってもらおうとか、そういうところまではできていないんですね。

ですので、長期的に見ては課題かなというふうに思います。

【山村委員】 まあ、トラップに必ずかかりますので、数とか、種類とか、そういうところで実際の対策を立てると。

で、昔ながらのよく薬で除去とか駆除とかしていたんですけども、二、三十年前ぐらいから、それは環境破壊につながる事なので、そういうことはやらなくなって、侵入さ

せないとか、目止めをすとかね。

【桑野学芸員】 出たら対策を取るという形で、昔は全館燻蒸とって、館全体にガスをまいて駆除してしまうという方法を、完全に殺してしまうという方法を取っていたんですけれども、ここは恐らく住宅街なのでできないですし、そういった形を取っているところは減ってきて、特に、近現代美術のところは減っているんじゃないかなと思います。

【山村委員】 全国的に減っています。

【鉄矢会長】 多分、私、美術館の立場じゃなくて、建築設計者としての立場で、そういうディテールが今後もまかり通るんだとうまくないんだろうと思っているんです。

だから、そういう失敗が変わっていくはずなんですよ。失敗とかそういう事故が次の事故を起さないようにするものなので、それをどこかに伝えておかないと、また同じような高さでパイプつなぐ、床から出てきて、こういう中へ入ってしまうよというのは、ちょっとまずいかなと思ったので、どこかで情報共有できるといいんだろうなと思った次第です。

ありがとうございます。

そのほかにもございますでしょうか。

【坂井委員】 中村さんへの質問になるかもしれませんが、副題が「中村研一が描く人体のフォルム」というのは、ちょっと珍しいような。ここは、中村研一による人物画とか、そういう形にならずに人体のフォルムというような言葉が使われている意図はどんなところにあるんですか。

【中村学芸員】 まず、中村研一の今回のテーマとしては、人物をモチーフにした作品を挙げて展示しようというふうに思っているんですけれども、この「フォルム」という言葉が、中村研一が繰り返し画家にとって重要なものとして自分の著作の中で言及している言葉になります。

あらゆるものにはフォルムというものがあって、このフォルムというのをいかに形として捉えて、画面の上に写し取っていくかというのが画家の腕の見せどころである。光や影であるとかというものによって浮かび上がるものの形というのがフォルムであるけれども、これをただそのもの固有の、アウトラインと捉えるのではなく、本質につながるものとして考えるときに、その言葉を「フォルム」というふうに指しているんだろうと思います。

そういった意味では、中村研一にとって、人体に限らず全てのものにそういうフォルムというものがあつたんだろうと思いますけれども、今回、この「北京官話」という目玉になる作品が、これは恐らく妻である中村富子夫人を描いている作品なんですけど、ただ、い

わゆる妻の肖像画というのともちょっと違うし、妻をモデルとして描いた婦人像というふうに見るのも、ただちょっと違うような、一風変わった感じのする女性像なんですね。

そういった意味で考えると、肖像画であるとか、そういった言葉で人体を描いたものというのを、ピンポイントで狭めてしまうのではなくて、もうちょっと広くくりで普遍的に捉えてみたいというところもありまして、人体という物として改めて捉えてみて、その物として捉えてみたときに、その物の固有のフォルムというものを追求していくというテーマにしたいなと思ひまして、副題を「人体のフォルム」という形にしています。

【坂井委員】 コンセプトを理解できていないかもしれません。でも実際に拝見すればと。

【桑野学芸員】 中村研一自体は、どちらかという人物像が得意なので、そういった意味では研一が描く人体とか人が並ぶというのは、すごく見応えがありますし、それでまとめてみるというのが一つの観点だと思います。

勝手にすみません、補足しました。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。そのほかはございますでしょうか。

ちょっと今回のじゃなくて、今、やっているもの、にやーにやーのところなんですけれども、火曜日を休みにして、来たら開いていなかったとかいうクレームみたいな、開いていないんだという市民からの、結局、実験的にやるというところで、我々も休みを2日したらどうだとは言ったものの、ここに関して言及されていなかったのも、これはどんな感じだったですか。

【桑野学芸員】 実は、特になかったです。ホームページがよかったんですけれども、見てきてくださる方が非常に多くて、事前に問合せはあったんですね。コロナだったので、いつ休みですかとか、時間は変わっていますかというのは比較的。向こうのお客様のほうに気にして下さっていたというのがあるんですけれども、なかったです。大丈夫でした。

大丈夫というか、内部的にも中村と会える日が、今までは平日は会えなかったんですね、開館時間中というのは。だけど、会える日が増えましたし、受付の皆さんの動きとかも非常に逆にスムーズになったと思うので、効果はあったと、よいほうでメリットが多かったと思います。

【鉄矢会長】 本当に2日休みにするのと、休館日を取るのと、そうじゃないのの違いが、こう違ったというのだけは、ちょっと分かりやすく残しておいていただけると、この実験のものがちょっと残るかなと思ひまして。

【桑野学芸員】 分かりました。ちょっと1年間、今年は特にコロナですから、この形で行くと思うので、また落ち着いたところで中村とともに総括してまとめていきたいと思っています。

【山村委員】 関連して、ホームページを市のページから独立させて新たに作ったと思うんですが、以前と比べてアクセス数とか、反響とかで変化があったかどうかについては、何か計る方法はあるんですか。

【鈴木委員（館長）】 市の公式ホームページの中に美術館のところが、枠がある。そのアクセス数というのは、特段、カウントしていなかったもので、調べれば分かるかもしれないんですけども、取っていないところです。

今回、新たに美術館専用ホームページを立ち上げて、ただ、ちょっと解析の仕方とか勉強中ではあるんですけども、例えば何の検索エンジンでこのホームページを訪れたかとか、スマホからなのか、パソコンなのか、スマホだったらiPhoneかAndroidなのかまで見られますので、ちょっと短い期間のデータではあるんですが、見ればiPhoneが一番多いとか、パソコンよりもスマホで御覧になられた方が多いとか、そういう傾向が見えてきたので、いろいろ工夫をすれば、広告効果は非常に高められるかなというふうに思っています。

件数についても、ちょっと短い期間のデータで数十件とかそういう単位になってしまうんですけども、継続的に調査をしながらデータのほうはまたお示しできればと思っています。

【山村委員】 やっぱりホームページのデザインがよくなるとアクセスが増えるとか、そういうことはやっぱりありますので、東京都美術館の場合もデザインの問題、それから、ツイッターのフォロワー数の問題、フェイスブックもそうですけれども、すごく、今、簡単に管理できるので、それによってだんだんとよくしていくとか、増やしていくための努力を、効果的にしていくというのは重要なことだと思うので、ぜひよろしく願いいたします。

【鈴木委員（館長）】 ありがとうございます。

【鉄矢会長】 では、もうちょっと入ってしまったみたいなんですけれども、意見交換等に移りたいと思います。次第の2です。

何か質問、意見等がありましたらお願いします。

ないですか。では、私から。

今、朝の「エール」という番組で、戦争が終わったらビルマに行って、その登場人物の名前が中井潤一という名前が出ていたので、中と一が一緒なので、これは中村研一が入ったのかなとちょっと一瞬思いながら、ここに取材に来たのかなとか何かあるんですかというような気がして、誰がモデルなんだろうと思いながら。

【桑野学芸員】 ここには何もありませんね。

【鉄矢会長】 そうか。だから、古関裕而が裕一になって、ちょっとひねっているの、中と一だけなんですけれどもね、合っているのは。

【坂井委員】 でも、今、それこそサイトを拝見したら、北京官話の下にシンガポール進軍みたいなのがありましたよね。従軍して描いたんですか、中村先生。

【桑野学芸員】 はい。取材に行って。

【坂井委員】 そうなんですか。知らなかった。

【事務局】 シンガポールは、軍人さんにモデルになってもらって。

【桑野学芸員】 シンガポールは絵のことですか。

【坂井委員】 絵。これは、じゃあ、モデルさんの。そうなんですか。

【鈴木委員（館長）】 従軍画家として結構な件数を残しています。その展覧会みたいなものを、何回か展示したことはありましたか。展覧会じゃないか。

【桑野学芸員】 展覧会ではちょっと扱いにくいので、それ単体のはやっていないはず。軍事郵便は作品としてあったと思います。

【坂井委員】 軍事郵便という作品があるんですか。

【桑野学芸員】 昨年のテーマが伊東深水でやりました。あれは中村研一ではないんですけれども。

【原田委員】 何年か前に、こちらの館で研一の戦争画を見た記憶があるんですが。所蔵品にはあまり数はないのでしょうか。

【桑野学芸員】 数はないんですけれども、「シンガポールへの道」というのが大作で、それは所蔵していますね。

【原田委員】 拝見しましたね。

【鉄矢会長】 シンガポールへの道というのは、水を飲んでいるやつですか。

【桑野学芸員】 そうです。

【坂井委員】 何か匍匐しているみたいな……。

【鈴木委員（館長）】 匍匐前進しているような、黒っぽい絵でしたか。

【鉄矢会長】 あれはだから、水を飲んでいるのがありましたよね、何かはつくばって。

結構、戦争は、勇敢な感じじゃないぞというのが、私、どなたか学芸員が、そのときの学芸員に聞いたのは、戦争画としては、鼓舞するものではなかったように見えるというのを言っていたから、そうなのかなと。

【桑野学芸員】 当時としては、恐らく戦意高揚のためにということだったと思うんですけども、中村研一の絵を見ていると、どちらかという人間生き方というか、当時の兵士の方の様子とかというのをなるべく捉えようという感じがしますね。

【坂井委員】 質問よろしいですか。前回、初めて参加したときに、これまでの活動記録とかを頂いて、そんなに詳細ではないんですが、一応、目を通させていただいた中で、学校との関係性とか、結構定期的にあるというふうなのがありましたよね。

環境がこんな環境なので、お尋ねしたいことは、運営協議会の年度計画はどんな感じなのかなというのをちょっと知りたいなということと、その中に学校との関係とか、特殊な今の、今年のこの環境はどういうふうに反映したスケジュール感だったりするのかというふうなことをちょっとお聞きしておきたいのですけれども。

例えば、今年は、これはやりましょう、何月と何月はこんなことがありますみたいな、そういう計画表みたいなものはあるんでしょうか。

【鉄矢会長】 美術館の計画ですか。

【坂井委員】 運営協議会として。

【鉄矢会長】 運営協議会としては、年4回でしたか。

【事務局】 年4回で、ざっとした話ですと、最初の開始、今年はちょっと遅くなってしまったんですけども、4月、5月ぐらいに皆さん顔合わせしていただいて、春の展示を見ていただく。今年1年、こんなスケジュール感で展示会をやっていきますよということのお話が、通常ならできるんですけども、今年はコロナの関係等ありまして、1回目が遅くなってしまったので、この間の夏の展示を見ていただいて、秋のこの会については、予算の話なんかもしていただいて、本来なら。どんな予算要求をしたほうがいいのかというお話をします。

【鉄矢会長】 ですから、本来ならばのを一回、ちょっとお話しいただいたほうがいいと思います。本来ならば4月のところで全体の今年度の予算を見る。もう一回決まりましたけれども、前年度の終わりには見えていなかったものを見る。

【事務局】 今年度の予算はこれです、こういう事業をやりますというお話しをさせていただいて、秋に次年度の予算はどんなものが必要なんですかみたいな話はさせていただきます。

それで、5月にやって、7月にやって、10月が予算の話になってくるんですね。

【坂井委員】 ということは、次回ということですか。今日は、10月ではありますけれども、でも、まだ2回目ですよ。

【事務局】 今回は、2回目なので、予算の話が出来上がりましたという話を次回にさせていただきますような形になってしまうと思います。

【坂井委員】 分かりました。

【事務局】 この中で、うちで予算を要求していますよというのが、最後の年度末にお話しさせていただいて、1年の総括みたいなことをその中でやっていこうと思っています。

【坂井委員】 なるほど。そうすると、きちんと私が読めていないのかもしれませんが、はげの森が学校と関係を取って云々みたいな、それを運営していらっしゃるの、桑野さんや中村さんがしていらしてというふうなことで、それを私たちが拝見したりする機会は、そんなになかったりするわけですか。

【桑野学芸員】 学校との関係は、基本的には鑑賞教室というのが一番メインに。

【坂井委員】 来ていただいて。

【桑野学芸員】 そうです。市内の全校の小学校4年生に来館していただきます。

【坂井委員】 全校の。

【桑野学芸員】 そうなんです。日を先生方とやり取りして決めてもらって、来てもらう、実際に展示を見てもらう。そこで、学芸員という職業に触れてもらいながら解説を聞いてもらって、美術館での振る舞いと、か、どういうふうに作品を見るかとかを学ぶという機会をつくっているんですね。

それは、あくまで小学4年生対象の事業になるので、特に、一般の方というのは募集とかはできないんですけども、たまたま居合わせれば様子を見ることはできます。

【坂井委員】 知らなかった。そういうことをしていらっしゃるんですね。

【桑野学芸員】 あとは、生徒さんと触れ合うとしたら職場体験ですね、中学生は。

【坂井委員】 美術館で働くという視野で来てもらうということですか。

【桑野学芸員】 そうです。中学校2年生で職業体験をするんです、今の子は。

【坂井委員】 そういえば聞いたことはあります。

【桑野学芸員】 外でやるんですけども、その一つとして美術館が入っていて、来ていただいて、そのときの展示の準備だったりとか、ふだんの受付でやっていることをちょっと体験してもらったりとか、美術館というのはこういうものですよというのを……。

【鉄矢会長】 美術館が閉まっているときに働いていないというふうに中学生は思っているので、閉まっている美術館の後ろでは何が行われているかとかそういうのも。

【桑野学芸員】 基本的には、開いているときだけじゃないのかな、準備のときもありますけれども、来てもらったりして。

【坂井委員】 それは、こんな環境になってしまったので、先ほどの4年生にしても、職業体験にしても、もうほとんど難しいことになってしまったんですか。

【桑野学芸員】 今年は、でするので中止になったんですね。

【坂井委員】 じゃあ、今年4年生だった子は、そのチャンスがないままということなんですか。

【事務局】 今年4年生になったお子さんたちには、招待券を全部、各学校に配っています。

【坂井委員】 じゃあ、来てねということですね。

【事務局】 なんですけども、一応、学校の図工の先生たちが、一回、自分たちが研究会をやって、次の展覧会の作品について学芸員から説明を受けてからそのチケットを配りたいと言っているのです、それで11月に市教研の図工部会をここで行って、その後にお配りすると。全員の先生ではないかもしれないんですけども、そういう趣旨でこういうことを見てほしいという形でチケットを配るといふふうにおっしゃっていた先生もいらっしやいましたので、今年はちょっとイレギュラーですが、そういう形で次の秋の展覧会とその先の3月の展覧会は、保護者の方と4年生1人は、そのチケットで入れるということで、今、小学校全校には、図工の先生にはお配りしているので、配布の仕方については各学校で考えてという形にしました。

【坂井委員】 分かりました。

【桑野学芸員】 やっぱコロナがあつて、如実にというか、すごくリアルに子供のそういう機会というか、先生がそのフォローをそういうふうにしてくださるという話なんですけれども、学芸員に触れる機会というのは本当になくなってしまったので。この部屋に来て説明を聞くとかというのもなくなくなってしまったので、そういったところでは機会がやっぱり失われているんだなど。

【事務局】 中学校の職場体験も。

【浜田委員】 職場体験は一切中止になりました。やっぱりよそへ行って、散らばって、お客様と会ったりするのもあるので、これは話し合いになって……。

【坂井委員】 どんな職種でも、もう全部中止なんですか。

【浜田委員】 全部です。

【坂井委員】 そうなんですか。

【鉄矢会長】 そういえば、公平性もあるんですかね。

学校との関係は、本当に開かれた美術館ということで、ずっと長い積み上げをやってきて、いろいろな歴代の学芸員がやってくれて出来上がってきたのを、みんながちゃんと継承してくれている。

猪熊弦一郎のときもあったんですよね。あのとき、楽しそうでしたよね。図工の先生も楽しそうに、学校に戻ってからも何か作るとかいうのと絡めたり、展覧会と絡めて図工の先生が絡んでいるんで、図工の先生が結構力があれば、ここの内容を引っ張ってもっとできるというのがありますね。

【事務局】 結構、あのときは、学校で猪熊の対話彫刻のワークショップというか出張授業で、ここの学芸員も何回か行ってやった学校もありますし。

【鉄矢会長】 なので、ここの委員ですので、ここのところはたまたま居合わせれば見られるんですけども、学校のほうは委員だから見るということは、浜田先生、できるんですかね。

【浜田委員】 いや、ちょっとできないです。

【鉄矢会長】 まあ、今回だって、コロナが収ってから授業見学をしたり、その絡んだ授業を行います。今のコロナは無理でしょうけれども。

【浜田委員】 できそうですね。学校公開も少しずつ始めているところなので、よかったら連絡いただければ。

【鉄矢会長】 ですよ。そういう格好はできるんですよ。

【浜田委員】 ぜひ見ていただいたら、ここの美術館とのつながりもよく分かるんじゃないかなと。

【坂井委員】 チャンスがあったら本当に。

【浜田委員】 ぜひ。

【事務局】 ここの鑑賞教室は、今年はやりませんが、日程さえ押さえていただ

いて、見ていただければ。

【浜田委員】 作品展は、今度やる予定なので、小金井の子供たちは非常にいい作品を描くので、宮地楽器ホールの下でやる予定なので、そこでも楽しめるかと。

【坂井委員】 分かりました。

【鉄矢会長】 その他、意見交換ですけれども、大丈夫ですか。

【原田委員】 さっきの猫の展覧会の報告の中でリピーターが多かったとか、家族連れが多かったと。地域の美術館としてすごくいいことだと思うんですけども、それからちょっと連想したんですが、年間のリピーターが使える会員券とか、あるいはファミリー券とか、そんなに安くならなくてもいいと思うんですが、それを持っていることで、自分たちはこの美術館の応援団なんだなという気持ちになれると思うんですね。

例えば、年間使える券500円だとか、特別展も見られますよとか、そういう検討というのはされたことはあるんでしょうか。

【桑野学芸員】 その辺りは、多分、いろいろ規定というか、どうなんでしょうか。

【鈴木委員（館長）】 現在のやり方といいますか、こういう公の施設の入場料とか利用料というのは、条例で定めなければいけないというふうに法律で定められています。法だったかね、定められていて、この施設も、小金井市はけの森美術館設置条例の中で、上限額を定めてやっていて、それで、展覧会の例えば企画展だったら幾ら、所蔵展だったら幾らみたいな形で内部で額は決めますけれども、先ほど100円のところを、今回、2階だけ使うので50円で減額にしたとかそういう話がありましたが、その範囲内で入場料を頂くという形になっています。

ご提案があったような回数券的なものであったり、変な話、年間フリーパスとかですよね。そういうのというのは、小金井の施設でいうと、回数券は、例えば体育館、トレーニングルームを使う回数券とかたしかあったと思うんですけども、それぐらいなので、ちょっと今まで具体的に検討したことがあるかどうかというのは、自分はよく知らない部分があるんですが、多分、ないだろうなというふうに思っています。

体育館の立てつけがどういう立てつけで料金設定をしているかというのを見てみて、うちでも活用できるものがあれば、おっしゃるように、ディズニーランドも年間パスを持っていたら何回でも行ってしまいたい人はいますので、そういうのも、他の自治体の例なんかもいろいろ調べて何かできることがないか考えてみたいと思います。

【原田委員】 もう一つは、サポーター制度みたいなことで、美術館のサポーターとい

う制度をつくって、それに例えば年会費500円になりますと。その人は会員証を持ってくればいつでも見られますよ。会員証は年一回の更新とすれば、継続してサポートできるので。というような方法もあるかなと。そういうのができたらぜひ買いたいと思っています。ありがとうございます。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。そういう意見がこういうところに出てくるのも非常に重要だと思います。

参考までに、以前にもそういう意見があったときに、そのためには学芸員が常勤扱いにならないと駄目なんだというのがあって、サポーターのほうが美術館に詳しくなってしまうんじゃないか。サポーターが原田さん、原田さん、あれはどこにあるんですかと学芸員が聞くようになってしまうような美術館ではまずいだらうと。

その意味でも、やっぱり安定した学芸員がちゃんと働けるというような形にならないと、サポーターとか長く、もう地域の人ですからね、いるのが。そういうところのバランスが壊れないようにしないとというのは、という話も出ました。

今、そういう話を聞きながら、学芸員顧問の薩摩先生のこだわりというのは、何か追悼文集か何かできるのか、あってもいいような気もちょっとしますね。

今、はけの森美術館になって何年目なんですか。

【桑野学芸員】 ちょうど30年ですか。

【事務局】 いや、30年以上たっています。

33年か、建物が建って……。

【鉄矢会長】 違う、はけの森美術館……。

【事務局】 はけの森美術館になってからだと……。

【坂井委員】 10年くらいじゃないですか。

【事務局】 ですので、平成18年だから、2006年にはけの森美術館になったので、だから、14年ですか。

【鉄矢会長】 来年15周年。周年行事をやらないと。

【事務局】 この前、10周年をやったかなと思ったら。

【桑野学芸員】 年報に、ちょっとご寄稿いただくかという話で、今年は年報発行の年なのでしていたんですけれども、かなわなくなってしまうて。

【鉄矢会長】 多分、どのぐらいご家族の方が、このはけの森美術館との関係を御存じなのか、メインの芸大の美術館教授としての動きは、すごくよく見えているのかもしれない

いですがけれども、ここでやってきたお仕事とかは見えないんじゃないかなと思って、ちょっとお見せしたいなと思ったんですね。

【鈴木委員（館長）】 一度、ご家族で展覧会にいらしたことがあって……。

【事務局】 ギャラリーコンサート。奥様と息子さんがギャラリーコンサートに来てくださったことがあるんです。

【鈴木委員（館長）】 喫茶棟のギャラリートークのときも来ていましたよね。

【山村委員】 本当に長く、こう、スタートして支えていただいたので、何かできればなと思いますけれどもね。

【鉄矢会長】 何も借りられないんだったら、振り返るはけの森美術館の薩摩の爪痕展とかね。

でも、ここの学芸員をやってから、いろいろなところにみんな散って行って、いろいろなことをやっている、活躍なさっている方は多いですからね。

【桑野学芸員】 そうですね。どこに行っているかも連絡が取れますので、一言書いてと言うと、多分、みんな書くとは思うので。

【鉄矢会長】 意見交換がなければ、最後の3番のその他に入りますけれども、その他といっても、まずは、校正、議事録に関する説明を。

【事務局】 本日、前回の第1回の議事録をお配りしておりますので、およそ1か月後の11月13日ぐらいまでに、コミュニティ文化課のほうにご提出をお願いします。

今までは、コミュニティ文化課に赤字を入れたものを提出してもらったり、あと、スキャンしてメールで送っていただいているパターンもありましたので、何らかの方法で大丈夫ですので、私のほうまでご連絡をお願いいたします。

以上です。

【鉄矢会長】 続いて、次回の運営協議会の日程について調整します。

【鈴木委員（館長）】 今年度ですと、あと1回か、場合によっては、もう一回開催できなくはない状況にあります。通常ですと、先ほど事務局からありましたように、1月末ぐらいか、あと、3月で展覧会時期に合わせて、一緒に観覧いただくというパターンで、そういう形になろうかなと思っています。

取りあえず、予算の状況の報告をする形だけであれば、1月下旬であれば令和2年度予算の内示が庁内で出ていますので、皆さんにも報告することは可能となっています。

あと、3月をどうするかですね。

【事務局】 3月に入って、展覧会がちょっと、展覧会の狭間に運営協議会が入ってしまったので、運営協議会のとくに展覧会を見ていただけない状況になってしまうので、もしできれば、お忙しいとは思いますが、3月に再度、もう一回やるかですかね。

【鉄矢会長】 あとは、運営協議会のここで先ほど出たような意見とか、予算がつかなければこれはできないよといったものが、なるべくこの場でディスカッションの俎上の、議事録に載ったほうがいいものがありましたら、ぜひ館長のほうからも提言、提案というか、ネタの提供をしていただければと思います。

やっぱり前も出たような設備更新に関しては、美術館という建物なので、役所が長期計画を、今、やってくれているというところで、少しは安心はしているのですが、それで本当に足りているのかどうかというのが分からないところがあったりしますので、それは、運営協議会でそれをもっとやるべきだろうとか、茶室に関してはどうするんだとか、茶室の見学会は、今度、じゃあ、一度させていただきたいです。

【事務局】 茶室の見学会は、ぜひしてください。

【原田委員】 あそこでお茶会をやるという可能性はあるんですか。

【鈴木委員（館長）】 できなくはないとは思いますが。

【原田委員】 それができると楽しいですね。

【鈴木委員（館長）】 そうですね。

【事務局】 ぜひ中学生にお茶会を、一番最初の公開のときにやりたいなと思って、ちょっと今年はコロナで無理そうなので、とりあえず見学会を行いますけれども。

【鈴木委員（館長）】 換気も悪いし、飲食の提供もなかなか難しい、コロナですから。

【事務局】 今年は、コロナがどうにかなるまではお茶会は無理なんですけれども、なので、運営協議会で明るいうちから見学していただくということは、全然やれますので、きれいになりましたので、ぜひ見ていただきたいなと思いますし、ぜひ、隣の喫茶棟のほうも、1階は元研一が住んでいたときのままですので、入っていただければと思います。

【鉄矢会長】 では、日程調整のほうに関しては、事務局のほうでまたメール等で連絡いただいて、調整していただくという格好になると考えてよろしいですか。

【事務局】 1月の末から2月にかけて、もし、今の時点で御予定が分かっているものがあれば、ここは駄目だよというようなところ、もしくはここがいいよということで教えていただけるとありがたいですけれども。少し先になりますが、茶室の見学つきで2月2日の15時半からはいかかでしょうか。

【鉄矢会長】 全員の都合が良さそうなので2月2日、15時半からよろしくお願ひします。

ほかになれば、よろしいでしょうか。

では、以上ではけの森美術館運営協議会を終了いたします。ありがとうございました。

— 了 —